

## (別紙 1)

### 論文の内容の要旨

論文題目 日本古代木簡論

氏 名 馬 場 基

本論文は、日本古代を中心とした木簡の史料学的分析を通じて、木簡の史料学的特徴を帰納的に明らかにし、木簡の分析に新たな視座を呈示するとともに、これらの分析から日本古代史・日本古代社会の解明、ひいては日本文化の基層的要素の抽出と分析を試みるものである。

この際、「木簡は、社会で、人間が利用した「道具」である」という視点を重視した。すなわち、木簡を作成し、機能を付与するのは「人間」であるから、木簡に「対する」人間側の「意識」「働きかけ」「認識・理解」こそ重要で、これらに木簡が内包する歴史情報が含まれている、と考えた。

そして、先学の提示した「書写の場」「木簡文化」および「仕事論」の視座を積極的に継受しつつ、「木簡の作法」という視点を提示した。

以下、部・章ごとに本論文で論じた内容をまとめる。

第 I 部では、具体的な木簡の史料学的分析を行った。

第一章では、荷札（貢進物付札）木簡を対象として、「荷札と荷物の関係」という視点を軸に、具体的な利用状況の解明と歴史的意義づけを試みた。まず、同内容の木簡が複数（二点）出土する事例について、近世の貢納物に関する規定を参考にして、二点のうち一点は荷物の外に装着され、もう一点は中に封入されたと論じた。また、材の共通性等から、二点の木簡が同時に作成されていることを明らかにした。次に、伊豆国荷札木簡の「追記」の位置・内容に着目し、貢納物を準備するどの段階で木簡を作成し、装着したかという具体的な製作・利用状況を検討した。その結果、荷札木簡は帳簿（計帳・歴名など）を引き写して作成された「帳簿の分身」であり、貢納物そのものの準備とは別作業で作成されたこと、そして帳簿の分身たる荷札木簡こそが、籍帳支配と現実社会とを繋ぐ役割を果たしていたと考えた。さらに、贅の木簡の分析を通じて、荷札が装着されない贅の存在を指摘した。

第二章・第三章では木簡にまつわる「例外」「ずれ」「違い」からその利用状況を検討した。第二章では、特徴的な形状・書式（杉材・〇三一形式・幅広で短め・割書）が指摘される隠岐国荷札木簡の例外的な木簡（広葉樹・一行書き・端正な文字）を確認した上で、例外の木簡の時期と品目に特徴があることを明らかにした。第三章「文献からみた古代の塩」では、塩の荷札木簡の整理を通じて、貢進国によって木簡の形状や同文荷札の分布に「違い」があること、遺構の年代観と塩荷札木簡の年紀が「ずれる」場合と「ずれない」場合がある＝都城での塩の保存期間に違いがあると想定されること、木簡に記された塩の貢進地には製塩遺跡が濃密に分布する場合と存在しない場合とがあるという「ずれ」や

「違い」、一方都城では塩荷札と製塩土器が一緒に出土する例が見当たらないという「ずれ」を見いだした。これらから、都城にもたらされた塩は大きく三種類、①保存期間長、固形塩、製塩土器生産、籠で輸送、貢納物、荷札装着、若狭（新技術の大型土器で量産）、尾張と三河（従来からの技術で規模を拡大）、②保存期間短、散状塩、鉄釜利用生産か、籠で輸送、貢納物、荷札装着、周防、③製塩土器に詰めて輸送、高級品か、貢納品ではない、荷札なし、大阪湾や紀淡海峡が主、という三種類の塩が存在し、①・②は国家的な塩であり、国家的な塩については、①は律令国家の「富の備蓄」のため、②は日常的な「富の利用」のため、と目的に応じて生産段階から管理していたであろうことを論じた。

第四章・第五章では、木簡の細かな観察と関連情報の融合による考察。第四章は、二条大路木簡中の京職進上木簡の、出土地点の変化（＝廃棄時期）・内容・穿孔（＝管理状況）を整理し、周辺の遺構変遷と照らし合わせて藤原麻呂邸・皇后宮職の活動の具体的状況を検討した。第五章では、木簡の検討中に生じた疑問（鼠がどの程度平城京内に棲息していたのか）について、正倉院文書・六国史等と合わせて検討し、鼠害の発生が平城京では比較的低調であるが、同時に一定数の棲息は確認できること、こうした状況から考えると「都市性」という点で平城京は平安京の段階とは異なる点を指摘した。

第六章では、木簡の作成・利用・廃棄のそれぞれの段階の事例に史料学的分析を加えた。作成の事例では、広葉樹の木簡は意図的に樹種が選択されたことを、都城出土の大宰府からの木簡と、史跡大宰府出土木簡の比較を中心に論じ、広葉樹選択の目的を端正な文字の書き込みと堅牢性に求めた。利用の事例では、長屋王家木簡中の一点（御田苅木簡）について、出土遺構の位置付け、長屋王家木簡の中での特異性、文字の割り付けの様相などを通じて「口上のひな形」である可能性を考えた。廃棄の事例では、題籤軸の軸部の長さに着目して、題籤軸は「文書の付札」であり「軸」は必須条件ではないことを指摘し、また軸部が完存しない場合の残存長と軸端部の状況、および出土状況の分析から、軸部に文書が巻き付けられたまま題籤部を折り取るという、文書の廃棄方法を想定した。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部での分析から、「道具としての木簡」「木簡の作法」という観点を提示し、日本の木簡の特徴や日本古代の文字継受・文字文化の様相について論じた。

第一章では平城宮・京出土木簡を中心に、出土状況とその史料的特徴を検討・整理した。木簡は平城宮・京各地から出土しているが、出土遺構を詳細に検討すると、出土点数が膨大な場合、建物の建て替えや移転など、何らかの場面・理由による集中投棄が背景に存在することを指摘した。また、木簡には一次史料として大きな強みがあるからこそ、出土遺構や伴出遺物との関係なども含めた総合的な分析・理解、個々の木簡に寄り添った詳細な観察が必要であることも論じた。

第二章では、新羅と百済の木簡にさまざまな相違点が目立ち、新羅と百済では別個の「木簡文化」を有していたと考えられることを指摘した。そして、「木簡文化」、すなわち木簡を道具として社会で利

用できる条件（＝木簡利用の規則・慣習・技術等の共有やその前提となる木簡利用の必然性といった社会的条件）という視点から考えると、朝鮮半島南部で六世紀代に木簡利用が展開していたにもかかわらず、日本列島で木簡が爆発的に増えるのが七世紀後葉まで降ることは、古代日本列島で木簡を広く受容する社会的条件が未成熟であったことと対応し、また日本古代木簡が百済木簡に類似することは、百済滅亡に伴う百済遺民の流入が日本古代木簡文化形成に重要な役割を果たしたことを反映していると論じた。文字文化・木簡の社会への「広がり」を重視しつつ、木簡の背景に存在する社会・人・空間（書写の場など）の重要性を主張した。

第三章では、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣について、テキストとしての文字記載＝「銘文」と、物体・遺物としての媒体＝「鉄剣」の関係という視点からの分析を試みた。そして、通常の剣銘は刀剣そのものの説明（由緒や由来・吉祥句など）である中で、稲荷山古墳出土鉄剣銘は個人の系譜や顕彰に重点が置かれており、きわめて異例な存在であり、その記載内容は剣銘よりもむしろ墓誌銘に普遍的にみられるもので、とくに書式の点もふまえると群馬県山ノ上碑がもっとも類似する点を論じた。

第四章は、記載内容の解釈だけでは説明しきれない木簡の事例を挙げて、そこに「木簡の利用者」を想定する必要性を論じた。木簡製作時や利用時には、木簡上に文字化・言語化して定着されていない（＝記載されていない）情報の伝達も内包させられており、木簡の「使い方」＝利用法にも何らかのルール・伝達力があつたと想定した。そして木簡という「道具」を取り巻くさまざまな総体を捉える概念として、広く社会で共有された「木簡の作法」を考えることが木簡の史料的分析に必須であり、また木簡を用いた研究にも有意義であることを論じた。

第五章・第六章では、木簡製作の最終場面である「文字を書く」部分に注目して、その特徴抽出を行った。絵画資料や日本中世史での研究成果から、日本中世初期に書写媒体を「手で持って」書く場合と「机に置いて」書く場合が存在すること、日本列島では独特の筆の持ち方が伝統的であることを指摘・確認し、それらが日本古代・中国晋代にまで遡る見通しを述べた。字形研究・書道史研究を援用しつつ、この二つの身体技法の存在こそ、二種類の仮名文字が生み出され、使い分けられつつ並存してきた理由であると考えた。また、晋代の古い文字筆記の身体技法——他の東アジア諸国では消滅した——の日本列島での温存から、考古学の成果を援用しつつ、日本列島の文化継受の特性を論じた。

補論では、杉山明・佐藤信編『文献と遺物の境界——中国出土簡牘史料の生態的研究——』の内容をふまえ、簡牘・木簡の特徴や研究の方向性を論じた。簡牘・木簡研究でしばしば用いられる「ライフサイクル」という語や、同書で展開された「生態系」という表現に対し、簡牘・木簡は独自に繁殖・成長する「生物」ではなく、あくまでも人間が製作・利用する「道具」である点を強調し、人間を主体とし、木簡を客体たる一つの道具として捉える視点たる「木簡の作法」論を展開した。